

空の ゆつゆつ散歩



江部乙が生んだ日本画家岩橋英遠。代表作に道立近代美術館常設の「道産子追憶之巻」と題された三〇メートルにも及ぶ、北海道の四季を描いた大作があります。熊が穴の中で冬ごもりをする絵から始まって、シマフクロウが生息する深い森があり、日の出を迎える白樺並木。リンゴの花は咲き唐松が芽吹く春、水田や畑は緑の色を濃くし、やがて稲は実り、とんぼの群生が一面を被うような秋。取り入れの済んだ水田、やがてまた白一面の冬に帰っていきま

す。大きな木の下には作家自身であるうと思われる人間がじっとこちらを向いて立ち、遠くには屯田兵であろう多くの人が一列に並んでいます。『そしていわく、変化が文化進展の目盛りであり宿命だとするならば、すべてのものが変わっていくのでしようし、変わらなければならぬのでしよう。けれども故郷の思い出が失われて行

く事は、遣り場のないものです。しかし私達は、それを郷土に住み必死に守り育てている人達には言ってはならない筈です。許されるのは住む人にも去った者にも共通して生まれ育った土地に、昔の何らかの証が記録されて在ればと希う心だけだと思います。』

絵に添えられた文は、多分話された言葉のすべてなのでしょう。

二十一歳で絵を志して上京し九十六歳まで相模原に住んで、昨年他界されるまで北海道を題材にした多くの作品を残された日本画家です。

故郷江部乙の農家に生まれたこともあってか、その作品の多くは自然の営みを題材にしたものが多く、土の中の芽吹きやのどかな田園やりんご畑、人の営みが丸みを帯びた暖かなタッチで描かれています。

少し年齢の進んだ人であれば懐か

しさがこみ上げてきますでしょうし、経験のないものにはかつての姿を学ぶのに好都合です。今はこんなに便利になったし、楽も出来るようになりましたがほんの少し前までは慎ましやかな生活と、厳しい自然を相手にする苦労があつたのだと再認識して、色々な物に対しての不平不満は何処かへ行つてしまいます。北海道に住みこよなく愛する自分の考えにオーバラップする所を感じて嬉しくなりました。

今年の2月、余市出身の宇宙飛行士毛利守さんが宇宙に飛んで立体図を作るべく地球の写真を撮りました。肉眼では白一面の北海道の大地が、季節が巡って今は世界一豊かな緑の大地に変身しています。その様子を空から見ましよう。と誘われて滝川市にあります「たきかわスカイパーク」に行つてきました。

クッキングキャスター

星澤

text : Hoshizawa Satiko

幸子



グライダーに乗せてもらったので、何も分らない頃、飛行機のパイロットに成りたかったこともあつてとても楽しみにしていました。教官の方が前座席に乗り後部座席に私が乗り、シートベルトの金具を止め、戦闘機に見るような透明のカバーを閉めていざ出発。動力付きグライダーに五〇メートルのロープで引かれてしばらく走った後、ふわつとした感触とともに離陸します。ジャンボジェット機と違い自分の足が地上から離れたと言つ感触があります。三五〇メートル上空になったころ、こちら側からロープをはずします。前を飛んでいたグライダーが弧を描いて飛び去ります。もう何も音はしません。「気持ち悪くないですか?」

「最高に気分がいいです!」二・三日降り続いた雨のせいか、川の水は濁り水量も増えているようです。河川敷に造られた滑走路から飛び立ち滝川の街四〇〇メートル上空をまるで鳥のようにゆつくりと、弧を描きながら上昇気流を感じながら空の散歩です。目がいいせいもあるのでしょうが地上の様子は手に取るように分かります。

普段は目線の高さでしか世の中を見ることしか出来ませんが、こ

うして空に上がると手に取るように地形などの状況を把握することが出来ます。

一目瞭然とはこのことなのでしょうが。

豊かな流れの石狩川を挟んで緑の水田、黄金色に変わりつつある小麦畑、ミニチュアのような家々。低木の生えた小高い山々。緑の大地はその名のとおり、途切れることなく豊かさを感じさせながら何処までも続いています。毛利さんもエンデバーから地球を見たとき地上の状況の違いを瞬時に感じたことでしょう。変化することは宿命ですがいい物は記憶にだけでも残したいと描きつづけた岩橋英遠画伯。地球は水が不足し

て六〇億の人間が住むのに困難な状況に差し掛かっていますのに、我が故郷北海道はまるで別世界の様に緑に輝いています。

でも、足元を見れば農業人口が不足し、緑を維持保全する事が困難な状況にあります。一三〇年かかって作り上げられ、世界にかなたる大地に成長した北海道。我が郷土の豊かさを実感して自分に何が出来るかを考え、皆仲良くし知恵を出し合えば怖いことはない。そんな思いを新たに、名残惜しくあつという間の空の散歩を終えました。

出来ることなら自分で操縦して気の会う人と北海道中を飛んでみたい、おにぎり持って。



アツモリソウ



たべる

きほん